

小さな命から世界の深淵に見入る人

杉本知政第七詩集『迷い蝶』に寄せて

1

岡山県の総社市から車で幾つか山を越えて、くにさだきみさんと一緒に杉本知政さんが暮らす赤磐市あかいはちに遊びに行ったことがある。杉本さんはくにさださんが編集発行している詩誌「径」の同人であり、また「コールサック」にも欠かさず寄稿してくれていることもあり、二人で出かけたのだった。杉本さんとは、何回か詩人の集まりで会ってはいしたが、いつも立ち話でゆっくり話したことはなかった。くにさださんとの打ち合わせの翌日にお願いで同行してもらった。杉本さんは、一九三二年生まれだが、今も少年の眼差しをしたジェントルマンだ。なぜそのようなみずみずしい感性を持っているのか、その秘密を探りたいという思いがあった。ご自宅の居間の書棚には、杉本さんの詩に出てくる昆虫たちの亡骸が宝物のように置かれていて、その虫たちと出合ったことを説明してくれた。杉本さんが心底から小さな命を慈しんでいるのだということを感じた。杉本さんは直接お聞きした話では、若い時から周りに詩人たちがいて、その詩人たちと精神が近いことも感じていたが、詩を書くことと思わなかったとい

う。なぜ書くかと思わなかったのかは、詳しく話されなかった。たぶん若い頃は絵を描いたり、声楽もしていたそうなので、詩にはエネルギーが向かわなかったのかも知れないが、周りにいた詩人たちの影響がいつしか杉本さんの中の詩的精神を顕在化させていったことは間違いないだろう。

杉本さんが詩を書き始めたのは、四十歳になってからで、たまたま同郷の永瀬清子に詩を見せたところ、いつのまにか詩誌「黄薔薇」に掲載されていて、同意した覚えもないまま同人になっていったという。このような話を杉本さんは真面目に話すので、くにさださんと私は可笑しくて笑い出してしまった。そのような強引とも言える永瀬清子は、たぶん同じ赤磐出身である杉本さんの詩的才能に驚き、多くの人にいち早く読んでもらいたいと願ったのかも知れない。第一詩集『沈黙への質問』は一九七八年に四十歳代半ば過ぎに刊行された。この詩集には六十一篇も収録されている。その中に「求道者」という詩がある。

求道者

春

天を背負うて蝸牛が通る

冬の眠りを飽食して

落葉の深層から蘇る

透明な祈りが

粘りつつ滴っている

地軸を引き

空を傾斜させている

後に

襤褸を纏い

独りの道者

運命とは測り切れぬ事実の累積か

(なむ)

化樂とはひとときの喪失か

(あみ)

彷徨とは見果てぬ希いを追う風か

(だぶつ)

道者は唯問う

虫は殻を合せ

沈黙を語るのみ

虫と道者

一途に

虚実を測り分ける秤を求め

天空

を目指し通る

この初期の詩から杉本さんの生きる哲学が記されている。「天を背負うて蝸牛が通る」姿から「透明な祈り」を感じ取り、その存在が襤褸を纏った求道者そのものであると発見している。杉本さんの詩の特長は、一匹の虫から世界の深淵を覗き見るしなやかな視線だろう。「運命とは測り切れぬ事実の累積か」という一行などは、事実から本質を掴み取っていく実践的な哲学者の思考そのものだ。巡礼者である「道者」の唱える「なむあみだぶつ」を解体させてしまい、虫の「沈黙の言葉」に近づいて行こうとする苛烈な求道者の心を描いているかのようだ。そして「虫と道者」が「一途に」現実と非現実の狭間をすりぬけて「天空」を指して歩んでいくことをまざまざと目撃しているのだ。この詩に全く無駄がないのは、沈黙のただなかで必要最低限の「沈黙の言葉」が静かに置かれているからだろう。その意味で杉本さんの詩は、小さな命を見つめながら世界の神秘に触れていく試みを目指されているのかも知れない。次の詩も求道者の思いを告げている。

トウ・シューズのための組曲

三、北の空

北の空は重い空
雲間 吹く風は灰色に痛く
人は皆背を丸め
温めたおもいを冷さぬ姿勢を採っていた

耐えている樹があった
耐えている川があった
耐えている虫達がいた
耐えている鳥達がいた

北の空へ背を向けるな
北の空を抱け
北の空をになえ

両手を開いて
極点を教える星をたずねる
君の胸の樹は冬を越すことで芽吹くのだから

この詩が目指す「北の空」を見詰める行為は、杉本さんが

取り組んでいく生きる姿勢でありながら、様々な存在者の目指すべき存在理由のように感じられてくる。この短い詩の中から溢れ出てくる厳しいけれども、限りない世界への慈しみのような精神性が、杉本さんの詩の魅力だ。世界の中で最も寒いだろう「北の空」の中に次の世界の芽吹きを透視しているけれどもその果てに温かく流れている命を垣間見ているのだろう。杉本さんがなぜ若い頃に詩を書かなかったのか、その理由が少し分かる気がした。このように自己に厳しく他者を慈しむ詩的世界を杉本さんはいつか書きたいと願ってきたのではないか。そしてようやく第一詩集を刊行したのかも知れない。その詩集の中で私が最も好きな詩は「山からのたより 二、虫こ姫抄」だ。その詩はリアリズムでありながら、いつのまにかファンタジー的な不思議な魅力で輝き始める。

山からのたより

二、虫こ姫抄

末娘は、ヨチヨチ歩きの頃から小動物、昆虫類に対する関心が非常に高く、よくむずかっけていても

「朝ちゃん、虫が居るで——」
と呼ぶと

「どけえ、どけえ？」

と、ピタッと泣くのを止めて飛んで来たものです。そして、掌に置いて御対面です。
だから、彼女のポケットは、蛙を初め昆虫達の飼育箱になっけてしまいます。

着衣を洗濯する頃となると、決って

「キヤー」

と母親の悲鳴が聴える事となります。

何しろ、ミミズの干物有り、雨蛙のミイラ、黄金虫の死骸等、何んでも出て来るんですから。

何時の頃からか、我が家では末娘に「虫こ姫」なる称号を捧げる事となった次第です。

以来、彼女の関心度は一向に衰えず、春ともなると野に畑に虫こ姫は大忙しです。

野菜の葉裏をたんねんにひっくり返しては
「お父ちゃん、こりゃ何の卵、このサナギはどねえな蝶になるん」

と言った類の質問を浴びせ、乏しい知識では対応し切れない父親は、

「百科事典、百科事典」

と満身創痍となって父権を失墜する訳です。

今年の春は事の外厳しく、虫達も越冬出来なかったのではないかと予想しておりましたが、四月の或る日冬越しのキャベツに、いるわ、いるわ、青虫達の集会の真最中。そ

の遅しい食欲を止める手だては農薬に頼るしかありません。急ぎ小型撒粉器（家庭用の手押しのもですが）把りました。

「一寸待ってー」

早速虫こ姫の登場です。

「可愛想なけえとる迄待ってん」

ボール箱にキャベツの葉を置き、そっと、そっと、青虫達を救出してゆきます。

やがて、

「見て、可愛い顔をしよう」

虫こ姫は、一匹青虫を指先に留め眼前へ提示しました。

一瞬、ハッとしました。彼女は「虫語」で語っていたのでしよう。私を始め大人の誰もがなくした、自然と語る方法を彼女はなくしていないのだと。

消毒を終えた視界の端、泡虫の扉をたたき、虫こ姫は小さな泡の中へ消えて行きました。

杉本さんはこの詩を童話のように書いたのだが、末娘のことを語りながらも、実は子供たちは本来的に「自然と語れる方法」である「虫語」ができたのに、いつのまにか忘れて大人になってしまふ存在なのだと考えている。杉本さんは子供の視線を通して私たちが忘れて「虫語」を聞き分けようとしている。自らの「虫こ姫」を呼び起こすにはどうしたらいいか、そんなどこかユーモラスな課題を自己に課している。

私たちが持つていたかも知れない「虫語」などの人間が他の命と交流する「言語」をもう一度、甦らせるにはどうしたらいいか、そんな自己課題を胸に秘めながら第一詩集は書かれたに違いない。

2

第二詩集『風の声』には二十三篇の詩が収められているが、その冒頭の詩「贈りものうた」を読むたびに、人が人に伝える最も大切な「贈りもの」とは何かを考えさせられる。

贈りものうた

虫の羽音を

耳傾けて聴くように

花子は

薄いレンズの内から世界を視ている

眼鏡を付けぬときの花子は

おぼろな事物を瞳に拾い

はじらいに似た不安を

その形に添える

父が傾け与えたひとしずくの血が

花子の視力を損なわせたのであろうが

かわいそうに と今は言うまい

あなたの親となった者達の

あの日 掌に温めた想いは

祈りそのものであったのだから

風を伝う鳥の声も

水色を湛えた空の深みも

ひとがふと頬に載せた

愛の痛みも

胸の小窓に映じるままに

あなたは総てを受け取り

感じればよい

霧の日 あなたの視界は丸く閉ざされ

細い小雨の足音にも心の小窓は曇る

母が手作る料理に向ってさえ

その小さな世界から事物は遠ざかった

何時の日にか

あなたのちいさな耳が

愛する人の足音に震えるように

心に世界を写す鏡を

花子よ 私は贈ったのです

この詩には、人は誰もが何らかの肉体的なハンデをどこか抱えているが、そのハンデがあっても、それを補うものがあり、それに気づくことが大切だとさりげなく語られている。娘さんには、杉本さんと同様な弱視の遺伝があるのだから、そのことによって逆に次のような感受性を得るだろうことを告げている。「風を伝う鳥の声も／水色を湛えた空の深みも／ひとがふと頬に載せた／愛の痛みも／胸の小窓に映じるままに／あなたは総てを受け取り／感じればよい」。見るだけでなく、風を通して聴こえてくる鳥など自然の生き物・事物の「ありのままを感受すればよい」ことを勧めている。たぶん杉本さんはそんな感受性が娘さんに間違いなく遺伝されたことの喜びをこの詩で表現したかったのだと思われる。その最も大切な感受性の能力を「心に世界を写す鏡」と語っている。詩集タイトルの「風の声」には、この風の声を受け止める「心に世界を写す鏡」を曇らすことなく、いつも磨いて世界を感じて欲しいと願いが込められている。

一九八九年に刊行された第三詩集『ひとすじのあかりを』の冒頭の詩「すべての愛を」にも第一詩集の小さな命がさらに重要なテーマとして反復されている。

すべての愛を

青虫の表情が識別できますか

ホラ いま笑っている

この楽しそうな笑顔が

そんな目付きで見ないで下さい

ひとときの休みもなく

キャベツを食べているのは

小鳥の爪 蜂の針をかくぐり

一刻も早く蝶に育ちたいからです

いのちを継ぎ継ぐために

愛する人に生命を捧げるように

カマキリの赤ちゃん

コオロギの赤ちゃん

を見たことがありますか

光りが身体をすかし

赤い血潮が脈打っている

独りで生きる意志がほとばしっている

クモいぎにつぶらな露が宿り

真珠の網を架けているのを

見たことがありますか
夜の中に虹の玉が地上に散らばり
夜明けのうたを歌っているのを
例え嵐 破こうとも
ひたすら耐えつくろう
ぼくらの持たない時の尺度で

あなたは虫達のように
耐え 待ち
信じられますか
総ての他人を
総ての愛を

一行目の「青虫の表情が識別できますか」を読むと、杉本さんは「虫語」を解するだけでなく、青虫の喜怒哀楽までも感ずることができるのかと驚いてしまう。宮沢賢治の詩の中に鳥の鳴き声を「鳥語」として解読したような詩を読んだことがあるが、青虫の笑顔を識別してその青虫の心に迫っていく詩を私は今まで読んだことがない。杉本さんは虫の命を人間の命と同等であると考えているからこそ、そんなことが可能なのだろう。「カマキリの赤ちゃん／コオロギの赤ちゃん／を見たことがありますか」という杉本さんの驚きの声は、いかに虫たちが真剣に生きているか、虫の尊厳を高らかに歌い

隣の産廃処理工場が有毒ガスを出して
周匝から上は同じようになつとんじやから

食べん方がええらしいよ
と教えて下さった
心無い企業の行いが
小さな生命を傷付けそれを慈しむ心を奪った
恐らく畑に在る総ての作物に被害は及ぼう
自ら育て食する人等は
透明な毒を防ぐ手段を持っていなかった
怒りと諦めがよじれつつ心からんでいる
ゴミ処理は必然であるとは言う
しかしそれを業とする者達は
今後は十分気をつけます
と詫びるだけでは済むまい
半枯れの葉を垂らしそれでも黄の花は咲いた
種を継ぎつぐためのひたすらな想いのために
トマトは無音で泣いているのだ
私も畑に立ち大声でわめきたい
虫を殺すな
作物を殺すな
人間を殺すな
と

上げているかのようだ。クモの巣に露がつき、真珠の網に変わるさまを奇跡のように受け止めている。その「独りで生きる意志がほとぼしっている」さまを生きとし生けるもの「総ての愛」だと感じている。そんな精神性の高貴さを私は杉本さんの詩篇のいたるところに感じてしまうのだ。

トマトの涙

トマトは季節を黄色く花びらで染めていた
赤ちゃんの瞳のように輝く実を結びながら
今年はいえようにいつてますよ
妻が頬をほころばせていった
数日後突然下半分の葉に黒班が浮び
徐々に枯れていった
やはりベト病か？
二度の予防薬散布も効果なかった
空しさを引き親族の結婚式のため数日旅した
帰宅早々隣家の奥さん菜園を訪ずれ
今年はこの地域一帯のトマトは全滅よ
六月二十日の新聞に大きく出とんじや

九八年六月

杉本さんの詩の特長は、この詩「トマトの涙」のように、生きものの置かれている場に立つて、自分ならこんな気持ちでいるという心情が溢れ出てしまうところだ。「今年はいえようにいつてますよ」というトマトの「野菜語」を聴き取って喜んでいたが、心無い産廃業者の毒ガスによつて自分の家も近所の農家も大切に育ててきたトマトが全滅してしまった。その時に杉本さんは「トマトは無音で泣いているのだ」といい、トマトと一緒に「私も畑に立ち大声でわめきたい」と語っている。このような心情の持ち主の詩人は滅多にいない。宮沢賢治が生きていたらきっとこのような心持ちの詩人だったと私には感じられるのだ。命の恵みを得ている人間がその恩恵を忘れて、いかに傲慢に振舞っているかがこの詩によつて照らし出されてくる気がする。ホテルなどで開かれる集会などでは立食パーティが開かれて、多くの料理が出されるが、食べきれないでさげられていくのを見ると心が痛む。なぜこのような命の冒流のようなことが繰り返されているのか。杉本さんの「トマトの涙」のような感性を取り戻し、「虫を殺すな／作物を殺すな／人間を殺すな」という人間の心の命を殺いでいかないう生き方を指すべきだと教えられるのだ。

新しい第七詩集『迷い蝶』はI章「迷い蝶」十四篇、II章「海の瞳」八篇、III章「明日の旅」十三篇の計三十五篇の詩から成り立っている。I章の冒頭の詩「声の無い会話」はもろん草花や虫や鳥たちとの毎朝の会話を記したものだ。そのような思いの詩がI章にずらりと並んでいて、読み進めていくと読むものの心が次第に洗われてくるのは、杉本さんが人間の言葉を超えて、虫語や花語や野菜語や鳥語との交流を目指されているからだろう。そんなことは不可能だと思う先入観の持ち主には、杉本さんの詩は理解できないかも知れないが、先入観を取り払って読んで欲しいと願っている。

II章は戦時中の体験や戦死した兄のことなどを語りながら、戦争の悲劇を語っている詩群だ。III章は過去の回想の中に現在・未来の想いを重ねながら、杉本さんの自由な心の境地を表現した詩群だ。この精神性の高さからは人が生きることが、様々な他者の命から恵みを受けることだと学ばされ、このような境地に近付きたいと感じさせてくれる。最後に詩集タイトル「迷い蝶」を引用してこの小論を終えたい。また詩集カバーの絵は杉本さんのお嬢さんである岸朝佳さんが最も相応しい絵を描いて下さり、心より感謝致している。「虫こ姫」だからこそこのような杉本さんの世界の深淵を覗いて描くことができたのだろう。父娘が力を合わせてこの世界の「迷い蝶」を探し続けているのだと感じられた。詩が好きならだけでなく地球環境を考える多くの人びとにこの詩集を読んで欲

しいと願っている。

迷い蝶

何もすることが無いからではない
断続的な雨手の痛みに耐えるのが辛く
まぎらわすため畑を耕すことにした

今年は殆ど一年の間
首一つ世の中から引っ込め

ひたすら静けさに身体を沈めやり過ぎてきた
時には痛みの合間を縫い

思いの翼を広げたり畳んだりして
未だ知らぬ国を地図の上で旅したり
長く病んでいる友へ届かぬ言葉を咬いたりもした

畑の害虫予防には

寒の間 晒すのが有効だと
うる覚えの知識をなぞって

スコップでガバツと土塊を起した
おっ 金蚕かまごと兜虫かぶとむしの蛹が出て来た
そおうと元の土の中へ戻してやる
長い長い時をつなぎ合せ

継ぎ継がれたいのちなのだから

隣の小松菜や白菜の葉陰には

冬を迎えながら

生涯を終えられない青虫や蝶の姿が見える

この星に季節を巡らす歯車が

少しずつ狂い始めていますよと

風が肩越しに声を掛け通り過ぎて行く

少し憤りの混じった悲しみを背に乗せ

還れない季節を目指し蝶は飛んで行った

詫びに似た気持ち少し後を追っかけていた